

JGA Golf Journal

JAPAN GOLF ASSOCIATION

特集1

規則の 近代化について

特集2

JGAハンディキャップシステム 普及に向けたゴルフ場の取り組み



特集 1 規則の近代化について



R&AとUSGAは3月1日に「ゴルフ規則を近代化するための変更案」を発表いたしました。この変更案はまだ最終的なものではなく、世界中のゴルファーからのフィードバックをもとにさらに議論したうえで最終案を決定し、2019年1月1日に施行することを目指しています。

規則の近代化について

今回の変更は、通常の4年に1度の規則改訂とは違い、規則全体を抜本的に見直し、規則の条項、構成、内容のすべてが近代化のために書き換えられます。この変更を議論することになった主な原因は、長年に渡って規則を改訂し続けた結果、規則がとて長く、複雑で難しいものになってしまったため、多くのプレーヤーが規則を理解できず、新しいゴルファーが増えることを妨げている可能性すらあることなどが挙げられます。この近代化のための変更は規則をより簡単な言葉で、明確で簡潔な規定にし、誰もが理解できるようにすることを目的としています。現段階の案では、規則の条項は34から24に減り、500ページに及ぶゴルフ規則裁定集

は廃止され、代わりにプレーヤーがコースに持っていくためのプレーヤー版規則、そして本規則、そして規則の解釈を助けるためのハンドブックを発行することが予定されています。

今回発表されている案は文字通り案の段階であり、最終的に決定されたものではありませんが、新しい規則の概要を知っていただくために提案されている主な規則について簡単に解説いたします。

(注:解説の罰打はストロークプレーの場合を前提としています。)

1 委員会が行動規範とそれに違反した場合の罰を制定できます。

現規則

エチケットの重大な違反があった場合、委員会は失格の罰を課すことができますが、失格以外の罰を課すことまでは認められていません。

新規則

委員会が行動規範を策定し、それに違反したプレーヤーに失格以外の罰、例えば、1罰打、2罰打を課すことができるようになります。

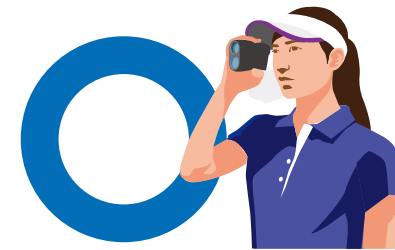
2 距離計測機器の使用が認められます。

現規則

原則として距離計測機器の使用は認められていません。そして委員会は距離計測機器の使用をローカルルールで認めることができます。

新規則

原則として距離計測機器の使用が認められ、委員会がローカルルールでその使用を禁止することができるようになります。



3 地面にくい込んだ球の救済はスルーザグリーン全域で認められます。

現規則

地面にくい込んだ球の救済は芝草を短く刈ってある区域に限定されています。委員会はその救済をローカルルールでスルーザグリーン全域に拡大することができます。

新規則

地面にくい込んだ球の救済はスルーザグリーン全域で認められます。委員会はその救済をローカルルールで芝草を短く刈ってある区域に限定することができます。

4 捜索中に球を動かしても罰はありません。

現規則

自分の球を捜索中に動かしてしまった場合は原則として1罰打を受けます。

新規則

捜索中に自分の球を動かしても罰はありません。そしてその球はリプレースしなくてはなりません。

5 パットिंगグリーン上で球を偶然に動かしても罰はありません。

現規則

プレーヤーが自分のインプレーの球を動かした場合は1罰打を受けます。

新規則

パットिंगグリーン上に限って、偶然に自分の球を動かしても罰はなく、その球をリプレースしなくてはなりません。この新規則の解釈はすでに今年からローカルルールで制定することが認められています。

6 ストロークした球が自分自身や、自分のキャディー、携帯品に当たっても罰はありません。

現規則

ストロークして動いている球がプレーヤー本人に当たったり、そのプレーヤーのキャディーや携帯品に当たった場合は1罰打を受けます。

新規則

偶然に当たったのであれば罰はなく、球はあるがままの状態プレーをしなくてはなりません。

7 パッティンググリーン上のプレーの線に触れても罰はありません。

現規則

パットの線上のパッティンググリーン面に触れただけで2罰打を受けます。

新規則

プレーの線上(「パットの線」という言葉はなくなり、「プレーの線」に統一されます)のパッティンググリーン面に触れただけでは罰はありません。

8 パッティンググリーン上の損傷箇所はその種類を問わず修理できます。

現規則

パッティンググリーン上ではボールマークと古いホールの埋め跡については修理ができ、それ以外のプレーに影響する損傷箇所(例えばスパイクマーク)を修理することは認められていません。

新規則

パッティンググリーン上の損傷箇所はその種類を問わずに修理することが認められます。ただし、自然の凹凸やエアレーション作業でできた穴は「損傷箇所」ではないので修理することはできません。



9 パッティンググリーン上の球を拾い上げるのに承認は不要です。

現規則

プレーヤー以外の方が球を拾い上げる場合、そのプレーヤーの承認を必要としています。

新規則

パッティンググリーン上の球に限り、プレーヤーのキャディーは、そのプレーヤーの承認なしに球をマークして拾い上げることができます。

10 ホールに立っている旗竿に当たっても罰はありません。

現規則

パッティンググリーン上からストロークした球がホールに立てられている旗竿に当たった場合は2罰打となります。

新規則

もはや旗竿に球が当たっても罰はありません。したがって、旗竿をホールから取り除かずにパットをすることができます。



11 プレーヤーの後方にキャディーが立つことが禁止されます。

現規則

プレーヤーがストロークをする前であればキャディーがプレーの線の後方に立つことはできますが、ストローク中もキャディーが後方に立っていた場合は2罰打となります。

新規則

プレーヤーがスタンスをとった後はもはやキャディーはプレーの線上の後方に立つことはできません。この新規則はプレーのペースを支援するでしょう。



12 球探しの時間は3分となります。

現規則

球を探し始めてから5分以内に自分の球を見つけることができなければ紛失球となります。

新規則

球を探し始めてから3分以内に自分の球を見つけることができなければ紛失球となります。この変更は球が紛失球となるリスクを高め、暫定球をプレーすることを促進し、プレーのペースを支援するでしょう。

13 救済を受ける場合は球を取り替えることができます。

現規則

罰なしの救済(動かさない障害物からの救済など)の場合は球を取り替えることができず、罰ありの救済(アンプレヤブルの処置など)の場合は球を取り替えることができます。

新規則

罰なし、罰ありにかかわらず、救済の処置をする場合は球を取り替えることができます。この統一は規則を簡単にするでしょう。

14 規則に基づいて球を拾い上げる場合、マーカーや同伴競技者に告げる必要はありません。

現規則

いくつかの規則(規則5-3, 12-2など)では球を拾い上げる前にマーカー、同伴競技者に告げることを要求しています。

新規則

規則に基づいて球を拾い上げる場合は、マーカー、同伴競技者に告げる必要はありません。ゴルフはプレーヤーが自ら規則を守るゲームであり、規則はプレーヤーが誠実であることを前提としています。

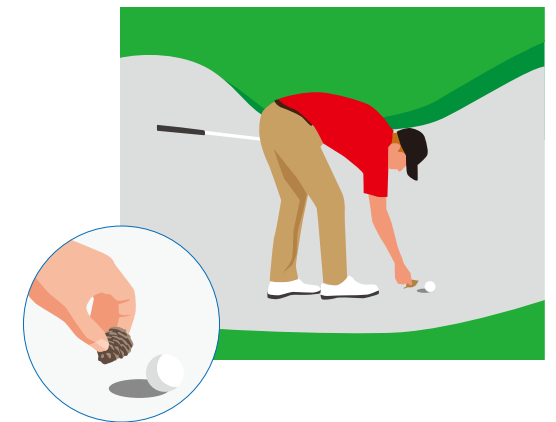
15 バンカー内のルースインペディメントを取り除くことができます。

現規則

球がバンカー内にある場合、そのバンカー内のルースインペディメント(木の葉などの自然物)に触れることはできず、この違反は2罰打となります。

新規則

球がバンカー内にある場合、そのバンカー内のルースインペディメントに触れたり、取り除いたりすることができます。場所にかかわらずルースインペディメントを取り除くことを認めることで規則を簡単にします。



16 合計で2罰打を払えば、バンカーの外にドロップできます(アンプレヤブルの処置)。

現規則

バンカー内の球に対してアンプレヤブルの処置をとる場合、最後にプレーした所がバンカー外でなければ、バンカーの外にドロップすることはできません。

新規則

合計で2罰打を払えば、球とホールを結ぶ線上でそのバンカー外の後方に球をドロップすることができます。バンカーが苦手なプレーヤーにとっては良い規則かも知れません。

17 「ウォーターハザード」 という概念はなくなります。

現規則

水域はウォーターハザードまたはラテラル・ウォーターハザードとして定めて1罰打のもとに救済を受けることが認められています。しかし、水域ではない区域、例えばブッシュ、雑木林、崖などは定義上のウォーターハザードではありません。

新規則

水域であるかどうかにかかわらずプレーがほぼ出来ないような林や崖となっている区域を「ペナルティーエリア」として定め、現規則のウォーターハザードと類似の1罰打での救済を受けることができます。また、このペナルティーエリア内の球をそのままプレーする場合は、ルースインペディメントに触れることの禁止やクラブを地面につけることの禁止はもはや適用されません。

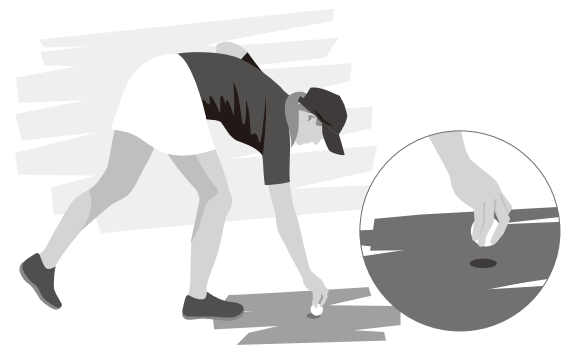
18 ドロップの方法が変わります。 高さに制限はありません。

現規則

ドロップの方法は、真っすぐに立ち、球を肩の高さに持ち、腕を伸ばしてドロップをしなければなりません。

新規則

球が空中をわずかでも通れば、ドロップの方法に制限はありません。とても低い位置からドロップすることで現規則にある再ドロップという追加の処置をしなければならない可能性を減らし、プレーのペースの支援にもなります。



19 救済エリアの計測は クラブレングスではなくなります。

現規則

規則に基づいて救済を受ける場合、例えば、救済のニヤレストポイントから1クラブレングス、球から2クラブレングス、などのようにクラブの長さでその範囲を決定しています。

新規則

クラブレングスではなく、20インチ、または80インチというように決められた一定のサイズの範囲が救済エリアとなります(例えば、救済のニヤレストポイントからホールに近づかない20インチの範囲に球をドロップする)。この規則はすべてのプレーヤーに同じサイズの救済エリアを提供します。計測はシャフトにつけた印によって行われるでしょう。

20 規則に基づいて推定、計測する場合、 プレーヤーの合理的な判断が支持されます。

現規則

規則に基づいて推定したり、計測をする場合、プレーヤーがどのような努力をしたのかに関係なく、実際にその推定や計測が間違っていれば、プレーヤーは誤所からのプレーをしたものと裁定されます。例えば、球がウォーターハザードの限界のどの地点を最後に横切ったのかを推定する場合などです。

新規則

プレーヤーがその状況下で正確に推定、計測するために合理的に期待されるすべてのことをしていたのであれば、仮にその後でビデオなどでその推定、計測が誤っていたことが発覚しても、プレーヤーが行った判断が支持されます。

以上、変更が提案されている主な規則をご説明いたしました。全体的には、例外規定を少なくし、球がある場所による禁止事項の違いや、救済の処置による手続きの違いを解消するなど規則を簡単にするための変更が顕著となっています。またプレーのペースを支援するための規則変更も多く見られます。そして、本来、ゴルフはプレーヤー本人の誠実さによって規則が守られる自己規律のゲームであることを強調するため、他の人の承認を必要とする規定の排除や、ビデオなどの技術によって発覚する事実よりプレーヤーの努力を優先する規定が提案されています。

ビデオの証拠の使用についての制限

TV中継がされるゴルフトーナメントでは、プレーヤー達が気づくことができなかつた事実が高解像度のカメラやビデオの再生、スローモーションといった技術によって明らかにされることがしばしばあります。そして新たに明らかになった事実によりプレーヤーが罰を受けたり、ときには失格となったり、そしてすでに時間が経っているにもかかわらず、プレーヤー達の順位に影響を及ぼすなど、そのトーナメントの他のプレーヤー、レフェリー、そしてゴルフファンに大きな混乱を引き起こす結果となってしまうことがあります。ゴルフは本来、プレーヤーが自らの誠実さと正直さに

よって、事実を判断し、正しく規則を適用することが求められるゲームです。プレーヤーが特定の状況下で限られた時間の中で自らの誠実さと正直さによって行った行動は支持されるべきで、人知をもっては知ることができないような事実がビデオ等の技術によって明らかにされた証拠が優先されるべきではありません。

そこでR&AとUSGAは「ビデオによる証拠の使用についての制限」についての解釈を示した裁定34-3/10を4月25日に発表し、この解釈は即時にすべてのゴルファーに適用されることになりました。この裁定では、2つのケースについて説明しています。

CASE 1

プレーヤーやその近くにいる人が裸眼では発見できない事実がビデオ等の技術によって明らかにされた場合、その証拠は採用されません。例えば、バンカー内でバックスイングする際にクラブヘッドがわずかに数粒の砂に触れていたことは通常、裸眼では気づくことができないでしょう。



CASE 2

規則に基づいて地点や場所を推定したり、計測する場合、プレーヤーがその状況下で正確な決定をするために期待されることをしていたのであれば、ビデオがそのプレーヤーの決定が誤りであるという証拠を発見したとしても、その証拠は採用されません。例えば、球がウォーターハザードの限界のどこを横切ったのか、プレーヤーはcm単位で正確に決定できるわけではありません。限られた時間内にプレーヤーは球の方向、地形などの状況や、他の人の証言などその時点で得られる情報からその地点を決定します。その後ビデオによりその地点が多少違う事が発見されたとしても、その証拠は採用されません。

この裁定の解釈に基づいて、ビデオ等の証拠を採用するのか、あるいはプレーヤーが行った決定を支持するのかの決定は委員会の責任によって行われることとなります(この裁定の詳細については、JGAホームページをご参照ください)。

JGAホームページでは新規則の全文の日本語訳の初案や、主要変更点の解説を掲載しており、すべてのゴルファーが閲覧することができますので、ぜひご参照ください。そしてR&Aでは新規則についての日本のゴルファーからの意見を受け付けていますのでR&Aアンケートページで皆様のご意見を反映していただければと思います(JGAホームページより日本語でR&Aのアンケートにご回答いただけます)。



スロープシステム導入で倶楽部公式競技参加者が右肩上がりに増加

現行のJGAハンディキャップシステム(USGAハンディキャップシステム準拠、通称スロープシステム)は4年目に入った。初年度の2014年から新システムを導入した北海道の札幌国際カントリークラブでは倶楽部公式競技参加者が右肩上がり増加。活性化につながっている。その内容を高橋広行前キャプテン、西川和夫キャプテン、豊嶋俊二支配人に聞いた。



スロープシステムの普及活動や導入効果について語る西川和夫キャプテン(左)、高橋広行前キャプテン(中)、豊嶋俊二支配人(右)。

—— 最初にスロープシステム導入までの経緯をお聞かせください。

高橋 当時、私は島松(札幌国際カントリークラブ)のキャプテンであると同時にJGAのハンディキャップ(以下HDCP)委員会副委員長、北海道ゴルフ連盟HDCP委員会委員長も務めていました。スロープシステムを推進していく立場ですから導入しない手はないと。

—— 西川さんも当時は北海道ゴルフ連盟のHDCP委員会副委員長として高橋さんをサポートする立場だったと聞きました。

西川 ええ。もちろんそういった立場的なこともあります。私の個人的な意見を言わせていただくと、昔のHDCPには疑問があったから新しいシステムを推奨したという

こともありました。

—— どのような疑問ですか。

西川 従来の倶楽部HDCPは倶楽部のHDCP委員会が決めるものでした。客観的にスコアだけで決めるわけはありませんから、どこかおかしいのではないかとこのことを感じていました。

—— 具体的にはどのような。

西川 私は若いころにHDCPゼロになりました。しかし、年を取って実力がなくなってもゼロから動かしてくれない。「適正なHDCPに戻してください」とお願いしても聞き入れてもらえませんでした。つまり、実力を正しく反映できていないHDCPだったのです。その点、スロープシステムは公平だと感じています。

豊嶋 西川キャプテンがおっしゃるように以前は人が人のHDCPを決めていましたから私情が入ってしまう可能性は否定できなかったと思います。「あの人には厳しいけど、この人には甘い」という不平不満もあったでしょう。

高橋 厳しいところは厳しかったですね。シングルになる時には特に。

豊嶋 いくらネットでアンダーパーを出しても、HDCP委員会で「シングルにふさわしい品格がない」と判断されればダメでした。

高橋 心技体がそろっていないといけなと言われていましたからね。

豊嶋 その代わりに、一度シングルになるとなかなか落ちませんでした。ですから、西川キャプテンがおっしゃるようにゼロのままずっと変わらないこともあり得たわけです。

西川 本人は早く戻してほしいと思っていたのにね。HDCPが変わらなければ年を取ると本当にきついですよ。

高橋 逆にシングルのボーダーラインの人は調子が悪くなると「何とか9のまままでいさせてくれ」ということもありましたね。

豊嶋 シングルは名誉でしたから、HDCPを落としたい。人によっては落としたり恥だという気持ちもあったと思います。スロープシステムでは毎月更新されるのが当たり前ですから、そういう意味ではフェアですよ。

高橋 HDCPが増えても「今は調子が悪いから」と割り切れる。また頑張ればすぐに取り戻せるわけですから。



【ハンディキャップの歴史】(概略)

年代	欧米	日本
17世紀後半	HDCPの概念広まり始める	
1900年頃	英国女子連盟が初のCR開発	
1911年	USGAが初めてCR導入(全米アマ優勝者のスコア)	
1920年代~	全米各地区でHDCPシステムの改善策考案	1950年代 JGA HDCP制度導入 (USGA制度を参考に開発)
1960~70年代	USGAが障害難易度査定法を考案 現行HDCP制度の基礎完成	1978年 旧JGA制度施行 (USGA制度を参考に開発)
1979年	USGAがスロープシステム開発着手	
1987年	USGAがスロープシステム正式施行	
2010年~	現在世界約60の国と地域で採用	2010年 スロープ導入決定 (USGAとJGAが正式契約締結)
2014年~		スロープシステム施行 (USGAハンディキャップシステム準拠)

CR=コースレーティング

—— スロープシステム導入時に反対意見などはありませんでしたか。

西川 ありましたよ。HDCP委員会からは「それならHDCP委員会はいらんではないか」という意見もありました。ですが、高橋さんと私でなかば強引に進めましたね。



高橋 慎重な意見のメンバーには「とにかくやってみれば良さが分かるから」と説得しました。いずれにしろ賛否両論ありましたからみなさんの意見を統一してからスタートというのでは時間がかかりすぎる。とにかくまずはやってみようという形で進めていきました。

西川 事務方は「やりたくない」というのが本音だったのではないですか？



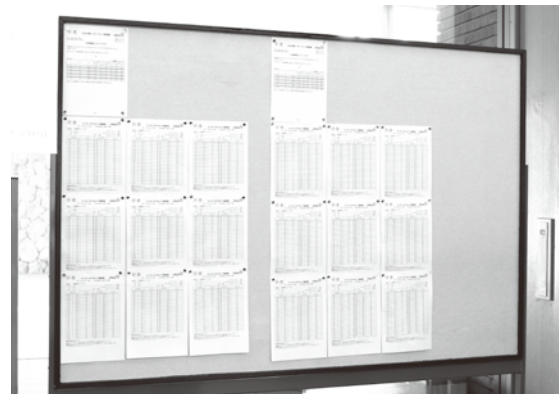
2600~2700人。スロープシステム導入後、年々増えてきています。参加者が増えた理由として考えられるのはHDCPの多い方にも入賞のチャンスが広がったこと。特に女性には好評です。

西川 従来のHDCPは上限が36でしたが、現在のHDCPインデックスなら女性は40.4まで。コースHDCPを算出すると45や46になることもあります。ですから、以前はなかなか入賞できなかった方も上位に入る可能性が高くなりましたね。

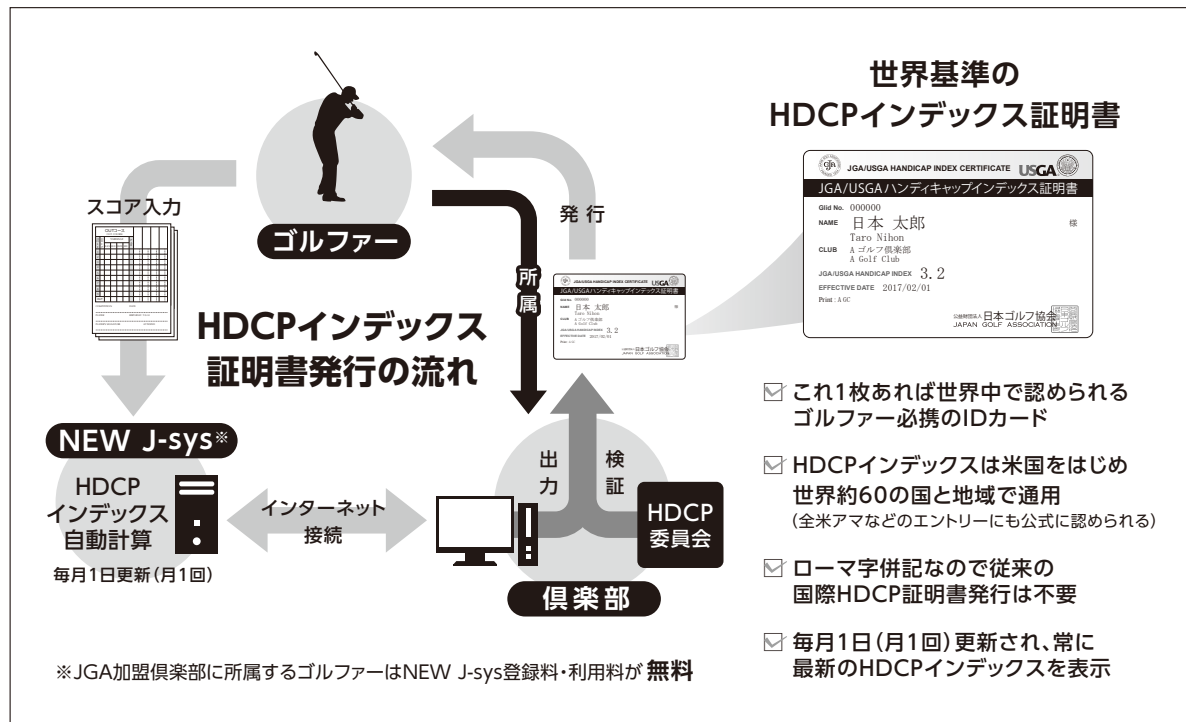
豊嶋 確かに当初はどういうものなのかよく分かっていませんでしたし、支配人会でも「事務方が大変そうだ」ということで慎重なムードがありました。ただ島松は当時の高橋キャプテンを中心に進めていましたので、私たち事務方も「とりあえずやってみよう、問題が出てきたらそこで対処しよう」という気持ちで取り組みました。今では定着していますし、結果として公式競技の参加者が増えましたね。

—— どのくらい増えたのですか。

豊嶋 島松では半年余りのシーズンで23の公式競技があります。従来は延べ2400人程度でしたが、今では



館内に掲示されたJGA公認コースレーティング認定書とコースHDCP換算表



高橋 夫婦と一緒に公式競技ができるようになったと喜んでの方もいらっしゃいます。以前、島松では月例などはHDCP別にA、B、Cと3つのクラスに分けて開催していましたから、別々のクラスならば一緒にプレーはできませんでした。現在はクラス別ではなくスタートコース別(札幌国際カントリークラブ島松コースには各9ホールA、B、Cコースがあり、A→B、B→C、C→Aの3通りの組み合わせで18ホールをプレー)で順位を決める公式競技が多くなりましたからね。

—— スロープシステムの長所を生かして下さっている例ですね。では逆に課題や改善してほしい点などはあるでしょうか。

豊嶋 私たち事務方からすれば公式競技の準備に手間がかかることがひとつの課題です。参加者それぞれのHDCPインデックスからコースHDCPを算出してスタート表などを作成することになりますから、どうしてもその作業に時間が割かれてしまいます。

西川 あるコースではメンバーさんがご自分で組み合わせをつくと自動的にその日のコースHDCPが入るソフトをつくったそうです。私もつくってみようと挑戦してみましたが、無理でした。

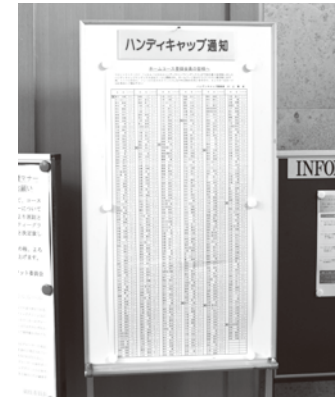
豊嶋 JGAでそのようなシステムをつくっていただくことはできないのでしょうか。

—— 実は、JGAには「Competition tool for club」というHDCP競技会用のシステムがあり、NEW J-sysに登録していただいている倶楽部さんには無料で提供させていただいています。告知が十分ではなかったようです。申し訳ありません。

豊嶋 そうでしたか。北海道ではあまり知られていないかもしれません。うまく活用できれば、人手が厳しいコースでもスロープシステムをより運用しやすくなると思います。



スロープレーティングをスコアカードに記載し、プレーヤーへの浸透を図っている



ホームコース登録会員の最新のHDCPインデックス一覧を館内に掲示している

高橋 北海道の地方部では人手の足りないコースがたくさんあります。中には支配人がフロント業務からレストランのウェイターまでしているところもあるほどです。そのようなコースでは倶楽部競技でスロープシステムを採用したくても人手の問題でできないということもありません。

豊嶋 私たちも最初は半信半疑でしたが、実際に運用してみてスロープシステムの公平さが実感できました。まだ活用できていないコースでもやってみれば良さは分かってくれると思います。そのためには事務方の負担を軽減することは重要です。そこがさらなる普及へのカギになるのではないのでしょうか。

西川 別の話ですが、北海道ではオフシーズンにカードを出さなくなる傾向がありますね。冬の間でも本州などでプレーする方は結構いますが、そのカードを出す方は少ない。ですから、正しいHDCPインデックスにならないわけです。

豊嶋 シーズン中ならばうちのメンバーさんが他のコースでプレーしたカードでも島松に来た時に出してくれませんが、オフの間はいらっしゃいませんので…。郵送してくれる方もいませんし。

西川 プレーヤー自身が入力すればいいのですが、面倒だと思っている方が多いですね。一度覚えてしまえばそう手間ではないことが分かると思いますよ。自分で入力すればパーオン率などいろんなデータが分かりますし、天候や誰とプレーしたのかななども書き込めます。自分のゴルフの記録になるから絶対に覚えたほうがいい。事務方の負担軽減にもつながりますし、もっと啓蒙したほうがいいのではないのでしょうか。

—— 貴重なご意見、ありがとうございました。